

忠臣蔵：折乃笠に与えられた命題

『悪人は、浅野内匠頭か、吉良上野介か』

2010年11月

(シャシ機構設計部部長時代)

【1】はじめに と 結論

忠臣蔵について熱く語っていきます。

まず、最初に 忠臣蔵 を簡単に紹介致しましょう。
図解雑学 忠臣蔵 菊池明 ナツメ社”からです。

『概略

元禄 14 年(1701)3 月 14 日、赤穂藩主・浅野内匠頭が江戸城松の大廊下で、吉良上野介に斬りつけるという事件があった。

これが発端である。

その場で取り押さえられた内匠頭は即日切腹を命じられ、赤穂藩は領地没収、浅野家は断絶となり、藩士たちはすべてを失って浪人となった。

一方の上野介はただの被害者とされ、処分はなかった。

これに不満を抱いた大石内蔵助ら 47 人の赤穂浪士は翌年 12 月 14 日、苦難を乗り越えたすえに、吉良邸へ討ち入り、上野介を討ち果たす。

そして、彼らは泉岳寺に眠る内匠頭の墓前に上野介の首を捧げると、元禄 16 年 2 月 4 日、幕府の命によって全員が切腹し、亡君のもとへと旅立つのである。』

今日のテーマは 忠臣蔵：折乃笠に与えられた命題 です。

ちょうど一年前、以下のメールをボディー設計部の方からいただきました。

『今度是非ブログで”忠臣蔵”について語って頂けないでしょうか？

私は忠臣蔵のストーリーが大好きなのですが悪人は吉良上野介説や悪人は浅野内匠頭説など色々な説があるのでぜひ折乃笠部長に語って頂きたいと思いました。

折乃笠部長はどの説が有力だと思われませんか？

この時期になるといつも興味が湧いてしまいます。

忠臣蔵の詳細は

基本的にドラマなんかで放送されてるものは吉良上野介が浅野内匠頭を指導する名目で虐めてるものが多いと思うのですが、少し前に小説で(ドラマにもなったみたいですが…)読んだものは浅野内匠頭がダメな人で吉良上野介に浅野内匠頭の正妻の瑤泉院が助けを求めたようなことが書かれていました。

私は最初に読んだ小説のせいか吉良上野介が悪人であるという説が一番しっくりくるのですが折乃笠部長はいかがでしょうか？

ちなみに忠臣蔵としておすすめの小説は森村誠一の【忠臣蔵】です。興味をもって頂けたのであれば是非一読してみてください。』

以上は、折乃笠に与えられた命題と受け止め、一年間検討してまいりました。

その結論は

◆悪人は 浅野内匠頭 だと思います。

その理由について、今日を含め五回に分けて語って行きます。

その前に小生がその結論に至った経緯についてお話致します。

お勧めの森村誠一の小説”忠臣蔵”を読みました。

合わせて豊田の図書館で”忠臣蔵”の文献調査をしました。

いろいろな興味深い事がわかってきました。

調査文献は

- | | | |
|------------|-----|--------|
| ① 図解雑学 忠臣蔵 | 菊池明 | ナツメ社 |
| ② 忠臣蔵を歩く | | ブルーガイド |
| ③ 忠臣蔵史蹟辞典 | | 中央義士会 |

そして、赤穂義士47士が眠る泉岳寺に行ってみりました。
浅野内匠頭及びその家来47士のお墓の雰囲気は、
何か悲しみと共に何か気配を感じる不思議な空気がありました。
それが一体何なのかは、これからの話で説明されていきます。

それではここで、折乃笠に与えられた命題 の答えに
一番参考になった意見を紹介致します。

森村誠一の”忠臣蔵”で非常に興味深い一説があります。

六代將軍綱豊に仕えた学者新井白石の意見です。

『仇討ちとは本来、よこしま討たれたる者のために近き身内の者が
代わって怨みを散じてやることでございます。
たとえば本人が自業自得で殺されても仇討ちはできません。
法に従って処刑されたことを怨んで刑の執行者を仇呼ばわり
できぬことも道理でございます。

赤穂浪士は主君自らの不調法により仕置きされたるもの。
仮にその処罰において喧嘩両成敗の定法に背くご裁決で
あろうと、お上が決せられたることでございます。

公儀においていったん済みたることを奉ずるのが秩序と
申すものであり、それを遵守させるのがお上の權威と存じます。
しかも内匠頭は殿中の作法を弁えず、私の怨みをもって
斬りかけたる者、この間三日の申し開きもないはず。
これを怨んで家来一同事を挙げたるは、忠に見えてさにあらず、
仇討ち免許もなしに吉良を討つたるは逆怨みに由りて
一類中申し合わせての徒党を組み、お膝元にて狼再任つたるもの

にして、法において許すべからざるところと存じます。』

更に吉良上野介の養子(実の孫にあたる)吉良義周(よしちか)の言い分です。

『武士というものの不合理にたまらなく腹が立っていた。考えてみれば父上野介はなにもしていないのである。』

すべてはまんじゅう一所から発した。勅使饗応役の指導を受けるにあたってまんじゅう一所を挨拶に持参して、いったい侮辱を被ったのはどちらか三歳の幼児でもわかる。

もともと刃傷の原因は不明なのである。それ人間を逆怨みし、殿中作法を無視して切りかかった廉をもって切腹仰せつけられるや、その旧臣が大挙して他人の屋敷へ乱入、多数のを殺傷した。吉良家は終始被害者であった。それを喧嘩両成敗をもって家断絶、嗣子を配流とはあまりにめちやくちゃではないか。

喧嘩とは攻撃の連続的交換である。だが吉良がいつ攻撃をしたというのか。討ち入りに際しても寝込みを襲った奇襲であり、十分な防禦の機会さえあたえられなかった。

吉良が赤穂勢に倍する兵力を擁しながら赤穂方の犠牲者はゼロ、吉良方が大量の死傷者を出したことを卑怯、臆病呼ばわりをするが、卑怯と言うなら十分な武装を施して寝込みを襲って来た赤穂方こそ責められるべきである。

だがその当然の理屈が通らないのだ。いきなり武装暴力集団に押し込まれ、乱暴狼籍の限りを尽くされた被害者が「仕方不屈き」で断絶、配流に処せられ抗議もできない。義周はあまりの馬鹿馬鹿しさに腹立ちを通り越していた。』

忠臣蔵では、変節、忍従、挫折、疑念、決断、別離、死という数々の現実が展開されています。

それらを乗り越えて、ついに本壤を遂げた彼らを思うとき、人は無条件に感動する、その証しが絶えることのない泉岳寺の香華であるとも言われています。

忠臣蔵は、まさに人間ドラマなのであると言われています。

しかし、小生はどうしても賛成できません。

浅野内匠頭の先を考えない軽はずみな行動により、家臣、その家族、赤穂領民全員を一瞬にして不幸のどん底に落とし込み、日本全国を大騒ぎさせた事は、人間ドラマの出発点としがたい事だと思います。

それでは明日は、吉良上野介と浅野内匠頭の人間像に迫りたいと思います。

【2】忠臣蔵：吉良上野介と浅野内匠頭の人間像

忠臣蔵は吉良上野介義央(きらこうずけのすけ)と浅野内匠頭長矩(あさおたくみのかみながのり)との確執が出发点です。

一般的に上野介は意地悪で悪党と言われているが、話はもっと深い所にあると考えます。

ここで、吉良家と浅野家の背景を紹介致します。

吉良上野介義央は足利義氏と今川義元の血をひく名門中の名門、上野介の妻富子は上杉謙信の血を引く。鎌倉時代からの名門家である吉良家は、将軍と朝廷を結ぶパイプ役として働く高家でありました。

赤穂浅野内匠頭長矩の4代前は浅井長政、ねね(豊臣秀吉の正室)の実弟で名門。

長政は秀吉の5奉行で名門中の名門。
ただし、赤穂浅野家は支藩で5万3500石の
小藩でありました。

ここでの一番のポイントは元禄時代というそろそろ武士道よりも
安泰を望む時勢に入っていたこと。
浅野家は武士道、吉良家は安泰と名門両家の根本的な考え方、
対応方法の違いが明確であることです。

さて、それではいよいよ吉良上野介と浅野内匠頭の間像に
迫ります。

忠臣蔵で最初の注目シーン “松の廊下事件” です。

皆さんには、臨場感を味わっていただくために
森村誠一の”忠臣蔵”ノーカット版をお送りいたします。

『憎々しげに言って立ち去りかけた。内匠頭の頭にカッと血が上ったが、
意志を奮って耐えた。ちょうどそこへ御台所(将軍夫人)のお留守居役
梶川与惣兵衛が小走りに走って来て、

「浅野殿」

と声をかけた。内匠頭が頭を向けると、

「御三脚より桂昌院様並びに御台所様に下しおかれた御恩賜に対し
大奥よりも御礼申し上げたき儀にござります。

つきましては御勅答式すませられましたならば、拙者までお知らせ
いただきとう存じます」

と言った。梶川の言葉が立ち去りかけた上野介の耳に届いた。

彼はくると振り向いて、

「梶川殿、御用の儀でござればいっさい拙者に申し掛けられたい。

このような御仁になにほどのことがわかり申そう。

黴(かび)のはえた記録を調べている間に、御三使には江戸を
発興されておわすわ」

周囲の人々にも聞こえるように声高に言った。

内匠頭の顔色が変わった。

「吉良殿、待たれよ」

そのまま帝鑑の間の方角へ行きかけた上野介を内匠頭が呼びとめた。その声が重い暗さを帯びていたのに上野介は胸にふと不安を覚えた。内匠頭のふだんの声はいまで言うテナーに属する高い音域であった。「まだなにか用かな」と立ち停まったのに、「ただいまのお言葉、武士として聞き流せませぬ。お取り消し願いたい」「ほう、拙者がなにかお気に障ることも申したかな」周囲に梶川や大勢の諸役がいるので、上野介も強気である。「武士に対しての辱めが過ぎます。お取り消しいただければ、拙者の武士の面目が立ち申さぬ」「はて、武士武士とうるさいことござるな。武士は武士でも殿中の進退作法も弁えぬ赤穂の浜辺の鯉節ではござらぬのか」それとなく二人のやりとりに耳を敬っていた数人が忍び笑いをした。

内匠頭の胸中でこれまで耐えに耐えていた垂比のバランスが崩れた。意志の力の限りを尽くして幸手いたストレスの蓄積が雪崩のように崩落した。いったんバランスが崩れるともはや止めようがない。落ち尽くすところまで落ちないかぎり、憤怒の堆積は平らにならない。もはやこれまでと内匠頭は意識の中でプツンと切れた堪忍袋の糸と同時に、腰に帯びていた小脇差の鯉口を切った。

一瞬阿久里や大石内蔵助や家臣一同のおもかげが臉をよぎった。「許せ」

内匠頭は彼ら一同に詫びた。同時にそれは愛しい者や懐かしい赤穂の地に告げた訣別であった。武士の面目のために、自分の愛しい者、大切な事物、今日までの自分を支えてくれたものすべてを備前長船一尺七寸の業物にかけて捨てたのである。

上野介はそれを見ていなかった。これ以上取り合っているとややこしい事態になりそうな気配を敏感に悟り、その場を立ち去ろうとして背を向けたところであった。

「上野介、待て！」
と言う切迫した声に振りかえった上野介の目に脇差を振りかぶった

内匠頭の姿が入った。
驚愕の余り、上野介は束の間麻痺したようにその場に棒立ちになった。
その間に内匠頭は肉薄して、
「この間の遺恨、おmoi知れ」
と眉間に斬りつけてきた。内匠頭の踏み込みがやや不足したのと、
烏帽子の鉄環に阻まれて、切っ先は額を浅く傷つけたのみで流れた。
傷の痛みとほとばしった血の色が上野介に恐怖を呼び醒ました。
派手な悲鳴をあげて上野介は逃げだした。
その背に追いつがって内匠頭は二太刀迫撃したが、いずれも切っ先が
かすっただけである。

第三撃を振り下ろそうとしたとき、内匠頭の最も近くに居合わせた
梶川与惣兵衛が背後から組み止めた。
「殿中でございますぞ」
梶川も突然の変事に動転していた。内匠頭が五万三千石を棒に振って
刃傷に及んだ心の切実さをおmoiやる余裕がない。
ただこの降って湧いた騒動を取り鎮めることだけに意識が集まっている。
「武士の情け、なにとぞいま一太刀、なにとぞなにとぞ」
内匠頭は血を吐くように絶叫しながら、旗本衆中に聞こえた大力の梶川を
ずるずると引きずりつつ、なおも上野介を迫った。
「殿中ござる。お静まりなされ」
梶川は内匠頭に引きずられながらも、羽交い締めにした手を緩めない。

人がわらわらと駆けつけて来た。
大紋を血に染めた上野介は逸早く駆け寄って来た高家仲間の品川豊前守
や畠山下総守に抱きかかえられ、内匠頭の周囲には、幾重にも人垣が
張りめぐらされた。

その間に上野介は医師の控室に運ばれていた。

内匠頭は機会を失ったのを悟った。
「我が事去れり。もはやお手向かいには仕らぬ。
衣服の乱れなど直しとうござればなにとぞお手を
お赦し下されい」
内匠頭は惣兵衛に言った。惣兵衛もようやく危険が
去ったのを確かめて、

「お腰の物をお預かり仕る」
と長船を受け取り、それを表坊主の関久和に渡した。』

この有名な一言「殿中でございますぞ」が即刻翌日の
内匠頭の切腹に繋がっています。

また、「許せ」内匠頭は彼ら一同に詫びた は、
内匠頭は自分自身の先を考えない軽はずみな行動を
知っていながら、衝動的に行動してしまった点を認めて
います。

このシーンでは上野介の意地悪ジジイそして臆病者としての
性格が良く現れています。

この上野介の性格がこの忠臣蔵の人情ドラマ感を大きく
引き上げているのです。

さて、次に内匠頭の別の人間像を紹介致します。
切腹する前のほんの少しの時間に家来と再会するシーンです。

『庭上の切腹場所へ赴こうとしたとき、田村右京大夫が来て、
「ただいま浅野内匠頭家来片岡源五衛門と申す者まかり出で、
主人儀切腹仰せつけられ由承り、主従今生の別れに主を
一目見たいとの旨切に願ひ出でております。
再三追い返しましたが帰りませぬ。いかが取り計らいましょうか」
と告げた。

庄田下総守がなにか言おうとする前に多門伝八郎が声を
張り上げて、
「その儀なら若しからず。武士の情け、さし許すであろう」
と言った。

処刑の場所へ導かれる途中で二人は対面した。
主従は万感胸に迫って言葉に詰まった。
「殿、何か仰せ聞けらることは」
源五衛門は、ようやく言葉を押し出した。

「……すまぬと申し伝えよ。ただすまぬとだけ」
 内匠頭の声も肺腑から絞るようであった。
 二人の頭上に、絶えず散りかかる桜の花があった。
 束の間の対面もすでにたがいの顔がよく見定められないほどに
 宵闇が濃くなっている。
 それが二人の頬を濡らした涙を隠してくれた。

切腹の場所を囲んで高張提灯が立てめぐらされて、事情を
 知らぬ者の目には夜桜を観賞する雅な集まりのように映じた。

内匠頭の切腹と相前後して在布の浅野家中にも運命の狂乱が
 進行していた。』

「……すまぬと申し伝えよ。ただすまぬとだけ」
 内匠頭はこれから起こる運命の狂乱を予期していたのです。

『風さそう花よりもなお我はまた
 春の名残をいかんにとかせん』

これは浅野内匠頭が切腹前に読んだ句であります。
 合わせて、耐え難い無念の思いを持って死んでいったのでしょう。

さて、次に上野介を意地悪ジジイそして臆病者として紹介して
 いるシーンです。

『世間の吉良に対する悪声は、邸内奥深くに閉じこもっている
 上野介の耳にも聞こえてくる。
 幕府の片手落ちの処断に対する不満と、彼の日頃の強欲騒慢な人柄に
 加うるに、浅野に斬りつけられてなりふり構わず逃げまどった見苦しさが、
 浅野びいき、吉良への悪評という世論となったのである。』

しかも世間は浅野の遺臣の仇討ちを期待している。
 それが無責任な臆測や噂となってますます上野介の不安を
 うながすのであった。

吉良邸の塀に連日剥がしても剥がしても落首や狂歌が貼りつけられる。

いずれも不公平な裁決を批判し、吉良を罵るものであった。』

江戸時代も今も同じなんですね。
嫌われ者世にはびこるです。

しかし、次に家来が上野介を慕っているという、ほとんど誰にも知られていない事実が紹介されています。

赤穂義士に討ち入れ、上野介が捉えられる寸前のシーンです。

『いまは主君、上野介の安否が気づかわれた。
どうせ死ぬなら主君のそばで死にたかった。
十三歳の頃より召し出され、君側に侍ってきた。』

世間では上野介を悪しぎまに言うが、家臣を愛し、
領民を想う名君である。
強欲の塊のように罵る世評もその合理性を尊ぶ人柄を表皮だけしか
見ていないのである。
無駄を排し、領邑を富ます経国の才能は領民の敬慕を集めている。

わずか四千二百石をもって大名並みの高家の生活と体面を
維持するために賄賂を取るのは当然である。
勅使饗応ご指南役ともなれば、それを受け取るのになんの偽りもない。
それは賄賂ですらなく、役柄に伴う正当な報酬である。

それをまんじゅう一所を差し出した浅野は礼を知らざるにもほどがあり、
高家ひいては幕府の権威を蔑ろにするものである。
浅野は処断されて当然であった。』

吉良上野介の別の一面を知ることができました。

さて、今日は吉良上野介と浅野内匠頭の間像に迫りました。

この二人は、元禄文化、5代将軍徳川綱吉、側用人柳沢吉保等によって運命を大きく操られているのです。

ただし、結果としてこの様な騒動を起こした浅野内匠頭の責任は大きいと思われます。

それでは明日は忠臣蔵の背景となるその元禄時代について語りたいと思います。

【3】忠臣蔵: 背景となる元禄時代

先ず、元禄時代について考察したいと思います。

時代は関が原合戦から80年たった一見天下泰平の元禄時代。戦国の時代は遠いものになっていたが、その余風がまだ戦国は忘れられていない時代であります。

(1) 徳川時代が安定期に入った時代

(2) そろそろ武士道よりも安泰を望む時勢に入っていたこと。

浅野家は武士道、吉良家は安泰と名門両家の根本的な考え方、対応方法の違いが明確である。

(3) 五代将軍徳川綱吉、側用人柳沢吉保の影響大。

そのような背景から、忠臣蔵は単に親分の仇を取る任侠物語ではなく、その当時の日本国の進むべき道の分かれ目を示す大きな物語のような気がします。

浅野内匠頭が切腹後の赤穂浪士に対する幕府、吉良家を操る上杉家、更には浅野本家の思惑が繰り広げられます。

天下泰平の元禄時代を表すシーンとまだまだ戦国時代と思わせるシーンがあります。

先ず最初に、元禄時代を物の見事に表わしたシーンがあります。賢覧煌びやかでこの上ない幸福と思われる将軍の生活は、実は庶民の生活に劣っている場合がある。特に真の生活の楽しさに大きな違いがある。そのような中に権力があり、幕府が動いているのです。

『天下の権勢と富を独占し、位人臣をきわめ、栄耀を尽くしても、この人工自然の下の花見は数千本の桜を集めた上野浅草の庶民の花見の楽しさにはかなわない。楽しさは大勢で分け合ってこそ倍加する。』

楽しみを独り占めするためにここまで這い上がって来て、庶民のだれもがいとも簡単に手に入れられる楽しさから疎外される矛盾を一様におもったのである。

しかし、将軍や保明や商家筆頭が庶民と肩を並べて花見を楽しめない社会の構造になっている。そのような階級差別によって社会が成り立っているのである。

庶民が豪勢な天然の桜の下で面白おかしく浮かれているかたわらで、将軍を中心とする支配階級が模造の花見で辛抱しているのである。

模造の花見をするために庶民の膏血を絞った巨費が投ぜられる。そのために動員される人力も莫大である。庶民なら簡単に手に入れられる自然の恩恵を独占するために模造するのが権力というものであった。

またそういうことのために、まさに権力は在った。』

『だが幕府は地方での騒動に神経を尖らせている。』

全国に隠密を派遣して完璧な監視網の下においているのである。

幕府は赤穂浪士の殴り込みを「内乱」ととらえる危険性が大である。正当防衛の理論は認められまい。なぜなら吉良上野介を国許へ呼び、赤穂浪士をおびき寄せたとみられるからである。

赤穂浪士を残滅するために上野介を餌にした。

火中の栗を好んで本国にかかえ込み、騒動仕ったる段、

公儀を蔑ろにする不届き至とが極許すべからず と家断絶城地没収の使者が乗り込んで来る様が、又四郎の陰には単なる想像図としてではなく実景として見えるのである。』

権力にとって、幕府にとって、赤穂浪士や上野介の行動は、現状を維持するための最大の邪魔者にしか過ぎないのかもしれない。

また、ここで吉良上野介の実子で上杉家の養子となり五代当主上杉綱憲に対する江戸家老志色部又四郎の言葉です。綱憲は赤穂義士が吉良家に討ち入っている事を知り援軍を出そうとしています。

『孝の前に忠でござる。

公儀お膝元をも慣らざる騒動はお上に対し異心を含みまかりおるものと釈られまする。

殿、我が上杉家は関ヶ原役より公儀の逆鱗に触れ百二十万石より十五万石に減封され、辛うじて生き長らえている家柄にございます。これ以上お家の危険を目すことはでき申さぬ。

たつてとの仰せであれば、この又四郎を斬って行かれませ』

これは父親の命よりもお家を守らねばならない戦国武将の慣わしなのかもしれません。

そしてもう一つ、浅野内匠頭と血の繋がる浅野本家のコメントです。

これもお家大事という戦国武将そのものです。

『「考えてもみよ。大石の狙いは吉良殿の首一つではない。

真の意図は公儀の片手落ちの裁決に対する抗議申し立てにある。

公儀がいったん下したご裁決に対する抗議はとりもなおさずご政道の批判である。

すでに滅びた分家の残党どもが徒党を組みお膝元でさような抗議を試みよ、お上に対し奉り異心を含む者として本家にどのような累が及ぶか測れぬ。

大石は本来浅野本家の家臣である。本家としてはなんとしても大石の

江戸行きは阻止しなければならぬ。
大石さえいなければ残りの衆がなにをしようと浅野本家に関わり
なきこととして通せる』

以上の様に、浅野家は武士道、吉良家は安泰と名門両家の
根本的な考え方、対応方法の違いが、皮肉にもこの時代も
同じで、両家の行く末を左右しているのです。

結果としてこの様な騒動を起こした浅野内匠頭の責任は
大きいと思われまます。

【4】忠臣蔵: 武士道と赤穂義士47士

武士道における赤穂義士を非常に厳しくコメントした
くだりがあります。

これは五代将軍徳川綱吉の大老格で絶大の権力を
ほしいままにした柳沢吉保の思惑によるものです。

以下がその背景です。

『柳沢吉保はおもしろくなかった。十五日朝、赤穂浪士討ち入りの
報を受けたとき、いやな予感がした。
これは幕府の偏頗な処断に対する抗議行動であり、とりもなおさず
吉保に対して公然と叛旗を翻したのである。
常ならば吉保はそのような動きを決して許さないであろう。
自分に対するどんなささやかな反動でも容赦なく踏み潰してしまう。
だが今回は赤穂浪士の背後に世論と時の動きの支持が感じられた。
いかな柳沢の権勢をもってしてもこれには敵わない。
柳沢がここまでのし上がってこられたのも時の勢いを味方に
つけたからである。
この勢いをとどめることはだれにもできない。
浪士の反動を世論が支持し、時の勢いが味方し、
しかも吉保の最大のスポンサーである
綱吉までが密かに応援している気配が見える。』

そこで、吉保は自分の儒臣である荻生徂徠(そらい)に幕閣、世論共に赤穂浪士免罪に傾いていた時期に完璧な法理構成を作らせ、同情論を粉碎し、一党切腹の裁断に導いたのでした。

その法理構成は以下となります。

『一応、赤穂浪士の行為は武士道に拠って武士の面目を貰ったように見える。

それ故にこそ世間の賞賛を浴び、形骸化した武士道の精華を率先垂範したかの如き体裁を見せている。

だが武士道はいまや、戦場における武士の規範ではない。

武力によって戦乱が統一され、最大の兵力を擁した幕府のカサの下に確立され維持された平和であるが、平和そのものが一つの生命力をもって、制度を整え、礼式典範を完成し、多様な文化を開花させる。

法制の具備の下に秩序が保たれ、諸氏の生命の安全と財産が保障される。

経済が成長し、消費生活の発展とともに人間の欲望が多様化、高次化する。

槍一筋の働きによって諸民の指導者階級となった武士が、自らなにも生産しない消費者階級に転落して、武士道も戦場の名誉規範から平和時の武士の作法となった。』

『赤穂浪士の行為はご政道に対する挑戦であり、武士道に籍口した、実は法を無視した武士道の破壊なのである。

形式を要求される武士道において実はその形式を踏みはずしているのである。

強いて武士道というなら平和時の武士道を戦時下のそれと混同しているのである。

それを赤穂浪士の行為の一見華々しさに欺かれている。

たしかに浅野内匠頭に対する処断に対して不服はあったかもしれない。

だがそれは公儀が裁決したことであり、いったん決せられたからには従わなければならない。

それが秩序であり、上の権威というものである。』

小生、この法理構成には賛成です。

というのも、この頃の時代は柳沢吉保が率いる幕府に対する不満が大きく、その鬱憤として赤穂義士の討ち入りを支援する動きがあります。

確かに人情としては、理解することができますが、やはり確固たる武士道の法理が必要と考えます。

それによって、世の中の秩序が守られるべきと考えます。

ここで、その頃の武士道をもっとわかりやすい理解できるシーンを紹介致します。

背景を紹介なくても十分理解できると思います。

『「てつ殿、もう離さぬぞ。拙者、武士を捨ててもそなたを離さぬ」郡兵衛はてつの川水で冷えきった身体をひしと抱きしめて言った。半ば失ったとあきらめた、最も貴重なものを郡兵衛はいま取り戻したのだ。

郡兵衛が武士道貫くためにてつを拒めば、彼女は何度でも死を図るであろう。

ようやく取り戻したものを再び失うような愚を犯してはならぬと郡兵衛は自らに誓った。』

『しかし郡兵衛はてつを知り、彼女によってこれまで生きてきた世界とはまったく別の世界がある事実を知らされた。人を愛することによって郡兵衛は目を塞いでいた壁を取りはらわれ、異次元の世界の地平が開けたのである。それはなんと多彩な輝きと、生气に溢れた世界であろう。てつとともに吸う空気のおい、眺める空の色、聞く町の物音、味わう食物の味までが変わっていた。

それに比較して郡兵衛がこれまで所属してきた世界は形式と戒律に縛られた単色のなんと殺風景な世界であったことか。この多様な価値あるものに充ちた世界の中で家と主君のみを見つめ、形式に自らを拘束することにマゾヒスティックな美を見出している。知らなければそれも耐えられよう。だが、てつを知った後ではもはやあの地獄へは戻れぬ。

そう、てつとともに生きる人生に比べれば武士の世界は地獄以外のなにものでもない。

脱盟したことに後ろめたさを覚えても後悔はなかった。

これでよかったのだというおもいをてつを見る度に味わい噛みしめている。いま江戸の春の夜をてつとともにそぞろ歩きながら改めて自分の手に入れた幸せの大きさを反芻している郡兵衛であった。

安兵衛は「女のために武士道を捨てることを外道とはおもわぬ。歩むべき道が異なっただけだ」と言ってくれた。』

このほかにも、赤穂義士47士には、親兄弟、家族、恋人、知人との悲しい別れが多くありました。

武士道と人間生活の間に挟まれ、悩み続け、最後に

切腹していく人間ドラマがありました。

切腹が決定された時、あの大石内蔵助さえ、
最後に実子主税と決別する時、大きく涙し、
できることなら逃げ出したいと言っているのです。

ここまで、家来そしてその周りの人々を肉体的精神的に
苦しめた浅野内匠頭の責任は大きいと思います。

【5】忠臣蔵：討ち入り後の影響

討ち入り後の勢いをとどめることはだれにもできない状況に
ありました。

浪士の反動を世論が支持し、時の勢いが味方しました。

一見、平和な元禄時代に大きな波紋を投げかけたのです。

『いつかはと心の底で密かに期待していたことを遂に
やってくれたのだ。

太平の御代に武士道が形骸化しかけているとき、
武士のみならず、四民の目を洗うような快挙である。

彼らは、武士道というものの形を最も具体的に
ドラマチックに見せてくれたのである。

まして老中土屋相模守や稲葉丹後守は当初より
浅野を弁護していたので、一挙に著しく感動していた。

幕閣の興奮は綱吉に対する上申にもよく現れている。
「ご当代に至りてかような忠義の士の出でましたるは
偏に上様のご治世の賜と存じ奉ります」

と言上した幕閣に綱吉がまた喜んでいるのであるから
いい気なものであった。

事は綱吉の裁決を不服として発したのであるが、
幕府を覆った興奮の中で綱吉は自分の権威が
蔑ろにされたことに気がつかなかったのである。

ともあれ老中は閣議の結果、目付阿部式部、
杉田五左衛門の兩名を検使として吉良邸へ派遣した。』

『幕閣は赤穂浪士の処置について慎重な評議を重ねた。網吉自身が松の廊下事件に際しては浅野にのみ酷に過ぎたと後悔している節も見える。まして閣老はすべて浅野の肩を持っている。もともと内匠頭の処断を気の毒とおもう気持ちとそれを背後から操作した柳沢に対する反感が素地にある。この素地の上で浪士たちの忠義に対する感動が増幅されている。今度は公正に裁いてやりたいとおもう気持ちが、なんとか彼らを助けてやりたいという同情に大きく傾いている。浅野に対して一方的に酷に失した轍を、今度は浅野に甘く吉良に厳しくという形で踏もうとしていることに気がつかない。』

そして、ここで昨日述べた荻生徂徠(そらい)の法理構成が柳沢吉保によって網吉に提出されるのです。

『「まさに理路整然、間然するところのない論旨じゃな」
「上様」
「内匠頭遺臣には切腹申しつけよ」
「ははっ」
吉保は平伏した。鶴の一声は下った。
ここに内匠頭以下四十六名の運命は定まった。』

『赤穂浪士の処刑が執行された後、幕府の無情な処置に対する不満が募った。日本橋の視に「文武忠孝を励まし礼儀を正すべき事」と掲げられた御制札の第妄を一夜のうちに墨で黒々と塗りつぶした者がいた。これは明らかに幕府の処断に対する抗議であった。幕府は烈火のように怒って、「天下の御制札を汚すとは上を蔑ろにするのも甚だしい。必ず召し捕れ」と厳命を下した。とりあえず制札は取り替えたが、これもその夜の中に「不忠不孝を励まし、礼儀を正さざるべき事」と書き

換えられていた。

幕府は警戒を嚴重にしたが、庶民は抵抗をつづけた。
日本橋だけでなく、府内の諸制札場でも同様のいたずらが
つづいた。

これは上に対する庶民の命がけの抵抗である。
捕らえられれば命がないのを知りながら、体を張って
抵抗をつづけるのである。
「大の傑」と同種のいたずらであり、知的な諷諷がきいて
いるだけ、いっそう痛快だった。』

以上、五日間に渡って忠臣蔵を語ってきました。

ボディー設計部の方から与えられた命題に対し、
◆悪人は 浅野内匠頭 という結論に達しました。

と同時に忠臣蔵は、変節、忍従、挫折、疑念、決断、別離、
死という数々の現実が展開されていることを知る事ができました。

そして、赤穂義士47士が眠る泉岳寺に行つてまいりました。

浅野内匠頭及びその家来47士のお墓の雰囲気は、
何か悲しみと共に何か気配を感じる不思議な空気が
ありました。

それが一体何なのか？

それは、まさしく武士道の元に本懐を遂げられたが、
一人で死んでゆく人間としての悲しみと本心を語れない
無念があったのだと思います。

小生、この忠臣蔵を通して、日本人の精神の素晴らしさ、
日本の文化の深さ、そして日本の歴史を深く知る事が
できました。

機会を与えて下さったボディー設計部の方に感謝申し上げます。